



「研修便り」は、高知市立学校教職員研修の成果・内容の共有、研究所から発信する情報の周知を目的として、発行していきます。

防災教育推進教員研修会

平成29年8月1日（火）実施

概要

学校における防災教育についての在り方について研修を深める

- 研修Ⅰ ① 「大規模災害時に期待される学校の役割と事前対策から考える防災教育」
高知市防災対策部 地域防災推進課 地域防災推進担当係長 山中 晶一
- ② 「防災教育の徹底について」
高知県教育委員会事務局 学校安全対策課チーフ 清久 博文

防災教育の目的

最大クラスの南海トラフ巨大地震が、いつどこで発生しても、子どもたちを一人も死なせない

防災教育の目標

- ① 自分を守りきる力
- ② 自分にできる役割を考え行動する力
- ③ 安全な社会を支える大人になる力

「実践的で主体的な防災教育」を進めるには

- 1 災害・防災を「わがこと」として考える
- 2 必ずくる「大規模災害時に期待される学校の役割と事前対策」を地域や子どもたちと一緒に行う
- 3 「伝える・教える」だけでなく実際に想定して行動する

☆ 現状

- 1 子どもの防災意識が低いだけでなく、学校の教員、ひいては自校の防災教育を推進すべき担当の教員でさえ、自分ごととしてとらえられていないのではないかと。
- 2 南海トラフ巨大地震は「起こるかどうかわからないアクシデント」ではなく、「今後、30年以内に約74%の割合で、子どもたちが生きている間に必ずくる日常」である。

「教育の現場で防災を考え、実践することは「地域の未来を担う個性を育むこと」に他なりません。共に頑張りましょう！



研修Ⅱ 演習「避難所運営訓練（HUG）」 認定特定非営利活動法人NPO高知市民会議 理事 山崎 水紀夫



資源の分配

みんなで運営

お互い様精神

多様な視点で運営

避難所運営ゲームHUG

避難所運営は命の問題

避難所

定義：避難者が一定の期間生活する場所
場所：公民館や学校地域防災計画における指定場所
期間：自宅の修繕又は仮設住宅への入居まで
設置主体：行政
運営：避難者による自主的運営（町内会等）
学校は施設管理者としての役割

※ 避難所生活は震災関連死に直結している
阪神淡路大震災では、死者6434人中、約900人が震災関連死と言われている

避難所運営の課題

- ・ 知的障害・精神障害への理解不足
- ・ 女性の役割が限定（炊き出し・清掃等）
- ・ プライバシーのない生活の長期化
- ・ 高齢者の健康維持 等

支援力・受援力が問われる

【受講者の感想】

- ・ 防災教育のめざすべき姿と現状を、距離が近く地形的にも似ている小学校・中学校の防災士の先生方と考えることができた。これからは、今回のように地域性（人的要因・地形的要因）をもって、本校ならではの学習をするように指導したい。
- ・ 初めてHUGを体験したが、NPO高知市民会議の方の体験に基づく助言によって実際のイメージをもつことができた。防災リーダーになりうる年齢の中学生にも体験を通して学んで欲しいので、道具を借りてやってみたい。
- ・ 最悪の事態を想定した防災対策が必要であると改めて感じた。再認識したのが、学校としての安全配慮義務の重要性である。公的施設である学校としての責任を感じた。

概要

情報通信機器等の知識や技術及び活用方法についての研修を行い、教職員の校務における情報通信機器の利用を促進するとともに、情報教育に関する教員の指導力の向上を図る。

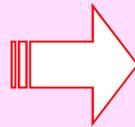
講義・演習「未来を創る子どもたちに必要な情報教育とは」

講師：高知県産業振興アドバイザー 川村 晶子 氏

2030年から考えるAI（人工知能）やIoT（モノのインターネット）の発達による仕事の変革

これまでの仕事

工業化社会を支える知識と技能が重要
（大量生産，大量流通，大量消費）
→ マニュアルを覚え，正確に同じように，早く行う定型業務処理能力
「1あるものを2，3，4・・・に」



これからの仕事

定型業務は自動化されるため，ロボットやAIにはできないことを考えて実行する力が重要
→ さまざまな問題から課題を抽出し解決することで価値を創造する力
「0から1を生み出す」

これからの教育を考えるうえで重要となる二つの視点

遠くも身近も意識した視点

自分の身の回り⇔地球規模で物事を考える。

未来から今を考える視点

過去の改善ではなく，未来を見て今できることを考える。

0から1を生み出す創造性と新たな知見が必要

プログラミング教育の本質は，プログラミングの言語を学ぶことではなく，論理的思考を学ぶことである

情報教育の変革

コンピュータの操作を習得し，学習を補助する



コンピュータの仕組みを理解し，課題を解決する

未来は，不確定要素だらけで混沌としているが，想定外のリスクだけでなく，予期せぬチャンスもやってくる。子どもがそんな未来を生き抜いていける力を身に付けることができる教育に取り組んでほしい。



「俳句 de Ideathon※」

時代の変化に柔軟な対応ができるよう，多様な考えを受け入れ，創造性を発揮できる人材を育てていく学習の一例として，俳句づくりを通じたアイデアソンの演習に取り組みました。一人ひとりが作った俳句について，グループでお互いにアイデアを出し合い，認め合い，話し合うことで創造性豊かな句を仕上げました。完成した句は，タブレット端末を用いながら比較し，最後は電子黒板でプレゼンテーションを行いました。



オレンジの
炎も熱も
夏の味

薫焼きタタキの写真から想像して完成した俳句のプレゼンテーション

※ Ideathon（アイデアソン）とは，アイデア（idea）とマラソン（marathon）の造語。特定のテーマについて，多様なメンバーが対話を通じてアイデアを出し合う手法。

【受講者の感想】

- 自分が受けてきた教育や，自分が現在学校現場で行っている指導は果たして必要なのかどうかということを考えてみると，将来何の役に立つのかが分からなくなってきた。新しい学習指導要領の中身をしっかりと理解し，これから生きていくうえでどのような力が必要なのか精選していきたい。
- 次世代の子どもに必要なことは，創造性，発想力，国語力（論理的思考）だとわかった。また，大人として子どもに「想定外のリスク」と「予期せぬチャンス」があることも伝えていきたい。
- 今後必要となること，教員としてどのような考えをもって指導していくかなど，とても考えさせられる研修であった。また，グループワークで，人と協働してみて自分では気づかなかったこと，創造できなかったことを話せて，自分自身にプラスになった。この経験を生かす授業をしていきたい。

ご意見・ご感想を高知市教育研究所 教職員研修班までお寄せください。